

紙芝居のすてきな特性

演じるのを見ていると「特性」がわかるよ

作品の世界が現実の空間に「出てきてひろがる」

紙芝居

演じ手と観客・観客相互のコミュニケーションがおきて作品の世界への共感が深め強められる

作品の内容への強い集中が作品の世界への共感の土台となる

作品の世界とは「作家の人生の凝縮」それは作品の「光の源」

観客は共感によって作品の世界を自分自身のものとする

共感の感性が育まれていく

- ・演じ手と観客がむかいあう
- ・画面がぬきだされていくことが「出てきてひろがる」をつくりだす

- ・舞台がある
- ・画面の連続性
- ・さしこむ動きが「強い集中」になる

- ・演じ手と観客がむかいあう
- ・「セリフ」中心で演じるので臨場感ができる
- ・ことが「コミュニケーション」をひきおこす

もっと知りたい人は「紙芝居・共感のよこび」まついのりこ著 童心社刊をどうぞ

- 紙芝居には「二つの型」があるよ
- ・作品の構成が、作品そのものの中で完結している型
 - ・作品の構成が、観客の参加を必要としている型
- 型によって、コミュニケーションのひきおこされかたがちがうよ